



資料No7-2

福井空港ビル再整備構想（案）

令和7年6月6日
福井県



1.福井空港ビル再整備構想について

2.福井空港の現状と課題

～福井空港の将来像と挑戦期の取組み～

- (1) 概況
- (2) 福井空港の将来像と挑戦期（5年度、6年度）の取組み結果
- (3) 防災分野
 - ①防災・救急医療拠点としての福井空港
 - ②能登半島地震等を踏まえた空港の防災上の課題
- (4) 観光・ビジネス利用分野
 - ①利用状況
 - ②他空港の事例から見た必要な機能
 - ③観光利用等の拠点を実現するための課題
- (5) 民間・地元利用分野
 - ①これまでの取組み
 - ②地域住民に親しまれる空港を実現するための課題

3.福井空港が目指す姿（案）

- (1) 県民の安全・安心を守る防災の拠点空港
- (2) 観光・ビジネス利用ニーズにきめ細かな対応ができる空港
- (3) 次世代を育み、地域住民に親しまれる空港

4.福井空港ビル再整備に係る敷地レイアウト（案）

5.新空港ビルに導入する機能（案）

- (1) 他空港ビルからみる福井空港に必要な基本機能
- (2) 新空港ビルに導入する機能（案）
- (3) 現空港ビルの施設現況と課題
- (4) 新空港ビルのゾーニングイメージと整備方針

6.今後のスケジュール

【参考】

- (資料1) 福井空港の将来像と今後の取組方針について
- (資料2) (R4～6年度) 福井空港機能強化等タスクフォース 体制表
- (資料3) 構想検討委員名簿、委員会での主な意見
- (資料4) ワークショップでの議論
- (資料5) R5・R6「福井の空を語る会」について

第1章

福井空港ビル再整備構想について

1. 福井空港ビル再整備構想について

【構想について】

本構想は、令和5年3月に策定した「福井空港の将来像と今後の取組方針について」（以下「将来像」という。次ページ参照。）において位置付けられた「新空港ビルの構想（案）」をまとめたものである。

構想の策定にあたっては、有識者を交えた検討委員会を設置し、これまでの空港利活用状況や、「将来像」における挑戦期（令和5年度、6年度）の取組み結果を踏まえて検討した。築59年が経過し老朽化が著しい現空港ビルの建替えに加え、福井空港全体の機能拡充・再整備の必要性、さらには「地域住民から親しまれる空港」という視点の重要性についても議論が交わされたことを踏まえ、以下の観点に基づき検討し、空港全体の構想として取りまとめた。

また、地域住民への説明や意見を伺う場としてワークショップを実施した。

防災拠点としての
機能強化を含めた
福井空港の再整備

観光やビジネスを
中心とした
空港利活用の促進

地域住民から
親しまれる空港

【検討委員会の開催状況】

キックオフ講演会 (令和6年6月23日)

第1回
(令和6年7月8日)

第2回
(令和6年9月11日)

第3回
(令和6年10月22日)

第4回
(令和7年3月26日)

第5回
(令和7年5月29日)

第1回
(令和6年9月4日)

第2回
(令和6年10月17日)

第3回
(令和7年1月14日)

委員会への報告
(令和7年3月26日)

発表会
(調整中)

地元住民の皆様への説明や意見を伺う場（ワークショップ）

1. 「福井空港の将来像と今後の取組方針について」（抜粋）

福井空港を新たな時代のニーズに適合する「航空拠点」として活用することを目指し、令和4年2月に福井空港機能強化等タスクフォースを設置し、空港全体の機能強化や利活用案について検討を行った。令和5年3月には「福井空港の将来像と今後の取組方針について」を策定した。(以下抜粋、詳細は「参考資料1」参照)

【福井空港の将来像】

将来の空港の姿として、グライダーを含む小型機などによる現在の利用者と共存しながら、離着陸の時間調整などに柔軟に対応できるという特徴を活かし、以下のような空港を目指す

- 多様な形態の小型機による、観光やビジネスを中心としたスポット的な利用を促進し、長期的には、地元理解等を前提に、定期的な利用を目指す
- 防災、救急医療の拠点として、大規模災害時に対応できるよう機能強化を目指す

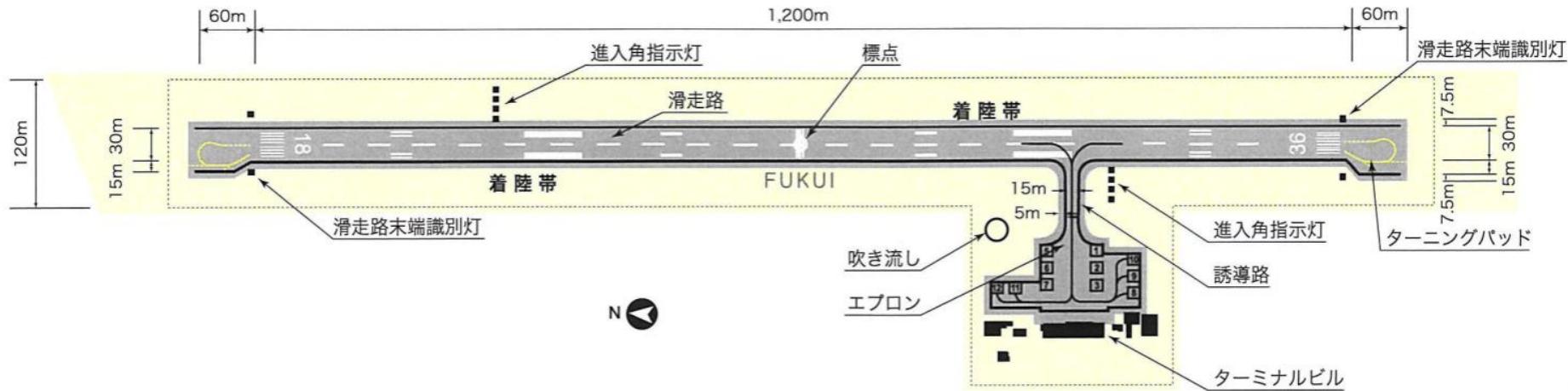
将来像を実現するために短期、中期、長期に分けて進めていく

- (1) 短期 (目途) R5年度～R6年度 = 挑戦
 - 様々なモニターツアー等により、福井空港の利活用の可能性を探る
 - 利活用の状況を踏まえて、具体的な新空港ビルの構想(案)をまとめていく
- (2) 中期 (目途) R7年度から5年程度 = 実践
 - 事業採算性のある取組みの商業運航の開始を目指す
 - 新空港ビルの構想を踏まえて、空港ビルを再整備する
- (3) 長期 = 飛躍
 - 駐機スポット数や格納庫用地の拡充などさらなる空港施設整備を検討し、定期的な利用を目指す

第2章

福井空港の現状と課題 ～福井空港の将来像と挑戦期の取組み～

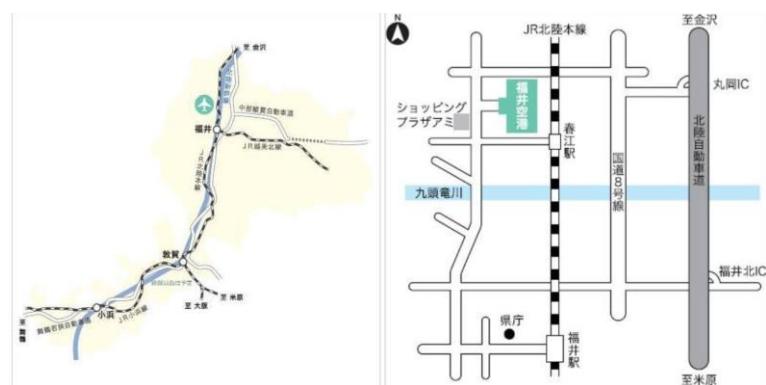
2. (1) 概況



地理条件

福井空港は福井県の北部、福井平野のほぼ中央にあって、北陸新幹線の福井駅から北へ約10kmに位置しており、車で約30分でアクセスできる。

最寄りのハピライン春江駅からは車で約5分（徒歩約25分）、北陸自動車道丸岡ICや、国道8号からも比較的近い。また坂井市を東西に横断する福井港丸岡インター連絡道路の整備が進んでおり、将来的にも更なるアクセスの向上が見込まれる。



※北陸新幹線は敦賀以北まで整備完了

空港諸元

位 置 : 福井県坂井市春江町江留中

運用時間 : 午前9時から午後5時まで
(午後5時までに日没の場合は日没まで)

滑走路 : 1,200m × 30m (着陸帯 1,320m × 120m)

エプロン : 約8,600m² 駐機スポット 11バース
(1バースあたり14m × 12m)

空港ビル : S40年度竣工（築59年）、鉄筋コンクリート造2階建（一部3階）
延床面積1,521m²（福井空港株、福井県）

給油施設 : 航空ガソリン（アブガス）、ジェット燃料

格 納 庫 : 防災ヘリ、ドクヘリ、県警ヘリ、福井空港株、民間事業者

気象観測施設 : 風向・風速、気圧、気温等の各観測施設

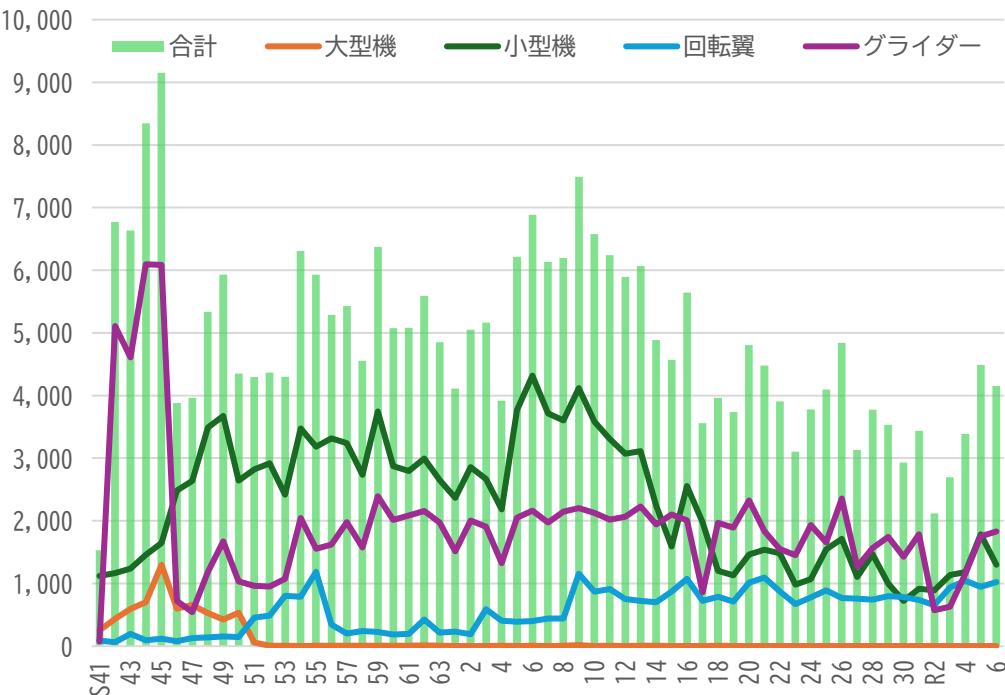
駐 車 場 : 146台

2. (1) 概況

沿革（概要）

1966年 6月 福井空港開港（定期便就航 同年6月30日）
1976年 4月 定期便休航
1991年 2月 福井県警察航空隊ヘリコプター配備
1997年 3月 福井県防災ヘリコプター配備
2003年 6月 拡張整備計画の中止を決定
2006年10月 空港管制業務を中部国際空港からの遠隔管制(RAG)に移行
2021年 5月 ドクターヘリ配備
10月 管制業務を大阪対空センターからの遠隔管制(RAG)に変更
2023年 3月 「福井空港の将来像と今後の取組方針」策定

◆福井空港の着陸回数の変遷



空港の利用概況

①防災拠点としての利用

- 防災ヘリ、警察ヘリ、ドクターヘリの活動拠点施設
- 災害時の救援基地【能登半島地震では救援活動の拠点】



県防災ヘリ



県警ヘリ



R6.1能登半島地震時

②観光等の拠点としての利用

- 定期便就航なし
- 自家用および事業用の小型機、ヘリの離発着



小型ジェット機の来港

③地域住民などによる利用

- 学生の課外活動としてグライダー利用
- 操縦士ライセンス取得の訓練
- JAXA等による研究開発の場
- スカイフェス等の航空レジャーイベント



グライダー

2. (2) 「福井空港の将来像」と「挑戦期（5年度、6年度）」の取組み結果

令和5年3月に取りまとめた「福井空港の将来像」では、令和5年度、6年度を「挑戦期」と位置付け、様々な取組みを積極的に行うこととしている。その取組み結果は以下のとおりである。

将来像	挑戦期の取組み結果	備考
防災、救急医療の拠点として、大規模災害時に対応できるよう機能強化を目指す。	<ul style="list-style-type: none"> 能登半島地震で明らかとなった課題、福井空港での対応状況を踏まえ、本構想で具体的な機能強化策を検討 	➤ 2. (3)防災分野 (p10~13)
燃料給油や機体整備機能の維持を検討するほか、グライダーや小型機による継続的な利活用を図る	<ul style="list-style-type: none"> R5年度およびR6年度の着陸数がコロナ前を上回る 	➤ 2. (1)概況 ◆福井空港の着陸回数の変遷(p8)
離着陸手続きの動線変更やロビーの展示内容のリニューアルなどにより有効活用し、利用者等の満足度向上を図る	<ul style="list-style-type: none"> ロビーなど新空港ビルの機能について、福井空港機能強化タスクフォースにて、激甚化する災害への対応拠点として必要な機能強化策を防災訓練や能登半島地震における利用実態を踏まえて検討 スカイフェス等のイベントを実施し、展示内容や使い勝手を検証 	➤ 2. (3)防災分野(p10~13) ➤ 2. (5)民間・地元利用分野①これまでの取組み「空港に親しむ機会の創出」 (p16)
現在の空港施設（照明設備なし）での運用時間の延長を地元と調整のうえ検討する	<ul style="list-style-type: none"> 能登半島地震時には臨時の照明設備で対応。常設のヘリ用夜間照明を検討 	➤ 2. (3)防災分野 ②能登半島地震等を踏まえた空港の防災上の課題 (p12)
民間事業者によるヘリの運航について、観光目的での新たな利用を提示する	<ul style="list-style-type: none"> 「福井の空を語る会」において、市町と連携して場外離着陸場の候補地を選定し、図面を作成。県内観光地付近に9か所の場外離着陸場を用意 (R7. 3 県HP公開) 	➤ 2. (4)観光・ビジネス分野①利用状況「場外離着陸場の確保と福井空港のヘリの拠点化 (p13)
プライベート機や、小型ジェット機のチャーター利用について観光・ビジネス目的での利用増加を図る	<ul style="list-style-type: none"> 運航費補助やPR動画等を使って航空機の運航事業者・ツアーを企画する事業者に営業 さらに令和6年度は運航費補助の対象を「観光目的」や「ヘリ利用」に拡充した結果、利用が大幅に増加 	➤ 2. (4)観光・ビジネス分野①利用状況「小型機の利用が大幅に増加」 (p13)
小型ジェット機を利用する企業への補助や、小型ジェット機による遊覧飛行の実施		
地元住民が空港に足を運ぶ機会の増加を目指す	<ul style="list-style-type: none"> スカイフェス (R5. 9. 30 : 来場者数約2,000人) や小型機体験搭乗会(R5年度 : 117名、R6年度 : 118名)に加え、「ふくいくうこうであそぼう(R6年度 計5回)」を実施 JAXAとの包括協定に基づき空港周辺小中学校計6校で航空教室を実施 (R6. 3) 	➤ 2. (5)民間・地元利用分野①これまでの取組み「空港に親しむ機会の創出」 (p16)
国外からのプライベート機の受入れに向けて、CIQ対応について運用を検討	<ul style="list-style-type: none"> いずれの運航会社も「海外から来る機体は福井空港には離着陸できる大きさではない」、「CIQ体制がある他空港で入国してから福井に移動するのが現実的」との意見 	➤ 5. (4)新空港ビルのゾーニングイメージと整備方針 (p33)

2. (3) 防災分野 ①防災・救急医療拠点としての福井空港

防災ヘリ等の利用状況と防災訓練等の実施

- ・R6年度着陸回数：防災ヘリ260回、警察ヘリ230回、ドクターヘリ300回

国土交通白書2020より 1982～1991年 約30年間で 2013～2022年

大雨	243回	約1.3倍	328回	災害の激甚化が進んでいるため 福井空港においても 一層の防災機能強化を図る必要あり
土砂災害	897回	約1.6倍	1446回	

- ・令和5年度福井県総合防災訓練（R5.10.7）において、福井空港で広域物資輸送訓練、広域医療搬送拠点臨時医療施設設置・運営訓練、血液緊急輸送訓練を実施
- ・小型ジェット機所有者で構成されるNPO法人主催の医薬品運搬訓練の実施（R6.11.16、17）



医薬品運搬訓練の実施

能登半島地震における福井空港の利用実績（救援機の受け入れ）

能登半島地震時、救援・支援活動の拠点空港として、全国から救援機を受入れ



①緊急空輸基地として活躍
(物資（病院食）の搬送)



②航空搬送拠点として活躍
(臨時医療施設設置、被災患者受け入れ)



③防災ヘリコプター等の
活動拠点として活躍

県内外の県警ヘリ・防災ヘリの利用
延べ68回（令和6年1月）

- ・県警ヘリ（警視庁、大阪府警、新潟県警、兵庫県警、広島県警、高知県警、京都府警、福井県警）
- ・防災ヘリ（和歌山県、大阪市、兵庫神戸、京都市、名古屋市）
※その他、民間による支援物資搬送ヘリ、報道関係などの利用あり

能登半島地震の際は、北陸地方で防災・警察ヘリが最大14機、同時に活動

防災計画で活動拠点に位置付け

福井県地域防災計画

①緊急空輸基地

②航空搬送拠点

県内の医療機関では対応しきれない事態のとき、航空機を活用した患者等の県外搬送のために設置する拠点
(航空搬送拠点内には臨時医療施設（SCU）を設置)

③防災ヘリコプター等の活動拠点

南海トラフ地震における具体的な応急対策活動に関する計画

①航空機用救助活動拠点

各救援部隊が駐機・燃料給油等を行う拠点

②航空搬送拠点

被災地から広域医療搬送受け入れのため被災外空港に設置する航空搬送拠点

タスクフォースでの検討

- ・福井空港機能強化等タスクフォースにおいて、防災訓練後のアンケート調査、能登半島地震後における関係機関への意見聴取を実施

- ・福井空港の機能強化に向けて対応が求められる事項を整理

〈参考〉災害時における空港の活用事例と被災事例

東日本大震災での航空搬送拠点化（花巻空港）

東日本大震災においては道路網が寸断し、花巻空港が航空搬送拠点となり、自衛隊ヘリ等で被災地から患者を大量搬送した。



【参考】自衛隊による支援



福井空港での自衛隊の支援活動はヘリコプター中心となること。
※自衛隊ヘリは1回あたり15人の患者輸送に対応

能登半島地震時の被災地からの患者受け入れ

能登半島地震で被災した能登空港

- 能登半島地震においては、能登空港の滑走路が被災（滑走路上に深さ10cm長さ約10m以上のひび割れ4～5箇所）し、ターミナルビル等も被災



出展:国土交通省
「令和6年能登半島地震における被害と対応」資料より

- 福井空港や小松空港、富山空港などの被災地近隣の空港が救援・物資輸送等の拠点としての役割を担った。
- 空港の燃料タンクが損傷した場合、応援に来た防災ヘリ等が給油できないため、周辺県などの空港へ燃料補給等のために戻る必要が生じる（周辺県への移動時間分、現場活動時間が短くなる）。



大規模災害時において道路網が寸断した場合でも、空港が迅速な対応可能な「防災ヘリ等の活動拠点」として重要な役割を果たすために、耐震化等の対策が必要



着陸帯において最大75cmの段差



切盛境界で段差発生 滑走路で最大15cm

出展:国土交通省
「空港における自然災害対策に関する検討委員会」資料より

2.(3) 防災分野 ②能登半島地震等を踏まえた空港の防災上の課題

「将来像」に向けた取組みや、委員会での意見、能登半島地震時に実際の活動に従事した関係者等へのヒアリングを踏まえると、福井空港の防災上の課題は以下のとおり

ヘリ駐機スポット（エプロン）等の機能強化が必要

・駐機スポット等の耐震化

能登半島地震の際、能登空港では滑走路や給油施設が被災したことから、福井空港においても災害時に確実に活動できるようエプロンや給油施設の耐震化が必要

・エプロンの広さが不足

能登半島地震の際は、北陸地方で防災・警察ヘリが最大14機、同時に活動しており、エプロンの広さ（駐機スポット数）が不十分

・ヘリ用夜間照明が未整備

ヘリの夜間緊急着陸のための固定式の照明が未整備

・給油施設の容量が不足

発災後、道路啓開が完了するまで最大3日間を要するが、現在の容量では防災関係ヘリの燃料が不足

・ヘリ・小型機の駐機スポット混在

小型固定翼機とヘリの駐機スポットが混在しており、緊急時に離発着するヘリの風により小型固定翼機が損傷する恐れあり

DMAT医療活動スペースの確保等、空港ビルの機能強化が必要

・DMAT医療活動スペース、資機材置き場の不足

自衛隊の大型輸送ヘリ1回あたりの患者搬送人数15名に対応するには、ロビーが狭く、ビル内に医療器具等の資機材置き場が不足、ビルから駐車場までの患者のスムーズな動線の確保が必要

・災害対応参集者の活動スペースの確保

災害時における、行政機関や自衛隊、医療関係、物資輸送関係等の参集機関の指揮調整・合同会議や、個別指揮所、休憩のためのスペースが必要

2. (4) 観光・ビジネス利用分野 ①利用状況

小型機の利用が大幅に増加

- エプロン内でのハイヤー横づけによる乗り継ぎなど、きめ細やかな対応が可能なことを、県外事務所と連携して事業者に広くPR
 - 大阪でトークセッション「地方空港の挑戦！福井空港の未来像」(R5.12.15)を開催するなど、県外に拠点を置く事業者に対し幅広く福井空港における運航費補助などの取組みをプレゼン
 - R3年度からビジネス利用に限り実施していた運航費補助を、R6年度から観光利用にも拡大(補助実績 R5年度：1回→R6年度：6回)
- 結果、令和6年度のプライベートジェット機等の利用は大幅に増加

【福井空港へのジェット機来港状況】

	R3	R4	R5	R6
来港回数 (補助あり)	7 (1)	4 (0)	7 (1)	18 (6)
うち ハイヤー横づけ	1	1	1	10



エプロン内へハイヤー横づけ



PR動画・チラシを作成し、全国の事業者に営業展開

チャーター便や次世代モビリティへの対応

- 団体や教育旅行など、現在の福井空港で離着陸可能な中型プロペラ機のチャーターによる利用可能性を検討
- 国内において進む「空飛ぶクルマ」等の次世代モビリティの開発進展もふまえて検討



空飛ぶクルマイメージ

出典：経済産業省HP
(https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/mono/robot/aam_eng.html)

場外離着陸場の確保と空港のヘリ活動拠点化

- 令和5~6年度の「福井の空を語る会」において、市町と連携し場外離着陸場の選定や管理方法等について協議し、県内観光地付近に場外離着陸場を9か所を用意
- 関西圏に近い嶺南地域の立地を活かし、若狭ヘリポートを利用した外国人観光客の誘客を図るモニターツアーを実施 (R5.9.25、26)
- ヘリ移動をメインコンテンツとした富裕層向けモニターツアーを開催 (R6.2.29)
越前市万葉菊花園駐車場、永平寺町九頭竜川河川敷 (ESHIKOTO付近) の場外離着陸場を利用
- 小型機に限定していた運航費補助をR6年度からヘリに拡大(補助実績 R6年度：4回)
- R5、R6年度 場外離着陸場の着陸回数：14回

【内訳】

- | | |
|----------------------|------|
| ・万葉菊花園駐車場 (越前市) | : 1回 |
| ・九頭竜川河川敷 (永平寺町) | : 3回 |
| ・荒磯ふれあい公園駐車場 (坂井市) | : 2回 |
| ・永平寺町営第3駐車場 (永平寺町) | : 6回 |
| ・レインボーパーク南条 (南越前町) | : 1回 |
| ・ふれあいシーサイドパーク (南越前町) | : 1回 |



R5 モニターツアー
(若狭ヘリポート)



越前市 万葉菊花園駐車場
(タケフナイフビレッジ隣り)

- 場外離着陸場図面を県ホームページに公開 (R7.3)



2. (4) 観光・ビジネス利用分野 ②他空港の事例から見た必要な機能

熊本空港

- そらよかエリア（飛行機に乗る人以外も利用できるエリア。一目で熊本と分かる例）



- くまもとSDGsミライパーク（SDGsを実践的に学べる全国初のSDGs教育専門施設）



- 内装に県産木材使用



下地島空港（沖縄県）

- プライベートジェット利用者待合室



- パイロット休憩室



- 開放感のある空間（メイン搭乗ロビー）



県営名古屋飛行場

- プライベート機搭乗手続、待合に対応



出典：県営名古屋空港HPより

天草空港（熊本県）

- 待合ロビー



- 到着ロビー内の状況



出典：熊本県HPより

他空港の事例から考えられる必要な機能

- ・プライベートジェット利用者等の搭乗手続や、待合に対応できるスペース
- ・まとまった人数の受入れに必要なスペース
- ・開放感や温かみのある内装デザイン

2. (4) 観光・ビジネス利用分野 ③観光利用等の拠点を実現するための課題

「将来像」に向けた取組みや、観光事業者やツアーアンダーコンサルティング会社等の関係者へのヒアリング、委員会での意見を踏まえると、観光・ビジネス利用拠点としての空港を実現するための課題は以下のとおり

プライベートジェット利便性の向上

- ・エプロンの環境整備
- ・小型機格納庫の不足
- ・個別の待合室確保等、利用しやすいビル整備

駐機スポットの広さ不足への対応、駐機時のヘリの風による影響をなくすエリア分け等、プライベートジェットが利用しやすいエプロン・スポット整備が必要

回送不要の小型機の運行を可能とし、小型機を使った観光・ビジネスの可能性を高めるために、小型機格納庫の充実が必要

プライベートジェットによる来県者数を増やすためにも、プライバシーが確保された待合室やパイロット休憩室等、ジェット利用者に対応した空港ビルの整備が必要

新たな取組みへの対応

- ・チャーター機等に対応した乗降口ビーの確保
- ・次世代モビリティへの対応

今後のチャーター便受入れや多数の小型機が集うイベント等、まとまった人数にも対応（到着・出発口ビー、保安検査等）できるスペースが必要

空飛ぶクルマなどの次世代モビリティへの対応も見据えた施設整備を検討

ヘリ観光活性化への対応

- ・ヘリ格納庫の確保
- ・場外離着陸場の確保

場外離着陸場の利用を増やし、福井空港がヘリの活動拠点として機能するために、ヘリ格納庫が必要

市町と連携しさらなる場外離着陸場を確保

2. (5) 民間・地元利用分野 ①これまでの取組み

グライダーや小型機による継続的な利活用

- 開港以来約60年、福井空港は小型機パイロットライセンス取得の場やグライダー飛行のメッカとして活発に利用
- 福井空港の大きな特徴は、定期便がないことから民間団体などによる小型機利用と防災ヘリ等の離発着が共存できていることであり、今後もこの利活用を継続

●学生や愛好家のグライダー飛行活動

- 活発なグライダー飛行は福井空港ならではの特色
- 週末には全国の学生やグライダー愛好家が福井空港に集結 (R6年度着陸回数: 1,832回)



大学生・愛好家が毎週末実施しているグライダー訓練の様子

●小型機パイロットライセンス取得のための訓練

- NPOによるパイロットライセンス取得の訓練活動 (R6年度着陸回数: 964回)



パイロットライセンス取得訓練の様子

※近年、福井空港でライセンス取得訓練の利用者が増えている

地域住民が福井空港に足を運ぶ機会の増加

- 地域住民から親しまれる空港を目指し、航空機に触れる場や航空分野を学ぶ場づくりなどの取組みを実施
- 空港への親近感を高めるため、様々なイベントを実施し、地域住民や子どもたちが福井空港に足を運ぶ機会を創出

●空港・航空機に触れる機会づくり

- 小型機体験搭乗を実施(体験者数 R5:117名、R6:118名)
- R6年市民向けイベント“ふくいくうこうであそぼう”を計5回実施
- R5.9.30 スカイフェスを隔年開催(来場者数約2,000人)



小型機体験搭乗
イベント



エプロンでラジオ体操
「くうこうであそぼうVol.3」



スカイフェスの開催

●宇宙・航空分野の先端技術を学ぶ場づくり

- R6.3 JAXAとの包括協定に基づき空港周辺の坂井市内の小中学校計6校で航空教室の実施



航空教室の様子



福井空港での先端技術研究



2. (5) 民間・地元利用分野 ②地域住民に親しまれる空港を実現するための課題

「将来像」に向けた取組みや、各種入居団体等の関係者へのヒアリング、委員会での意見を踏まえると、地域住民に親しまれる空港を実現するための課題は以下とおり

民間のグライダー活動、パイロット人材育成の取組みを継続・充実

- ・エプロンの環境整備
- ・講義室等、学びを支える環境整備

学生等のグライダー活動やパイロット人材育成のための訓練飛行を安心して継続できるよう、駐機スポットの広さ不足への対応、駐機時のヘリの風による影響をなくすエリア分け等、小型機やグライダーが利用しやすいエプロン整備が必要

小型機パイロットライセンス取得のための講義室など、航空人材を育成する民間団体の活動を支援する環境づくりが必要

開かれた空港づくり、地域住民が空港に親しむ機会を充実

- ・団体や地域住民の展示や活動スペースを充実
- ・体験搭乗等のイベントを継続・充実
- ・各種団体や研究機関との連携
- ・地域に開かれた空港ビルのデザイン向上

空港をより身近に感じてもらい、地域の資源として使ってもらうためにも、各種協力団体や地域住民の様々な活動が展開可能なスペースが必要

現在も実施している体験搭乗等のイベントは、空港や航空機に親しむことができる場として重要であり、継続・充実することが必要

地域団体と協力した防災イベントの開催や、近隣の研究機関等と連携・協力し地域住民や子どもたちが宇宙・航空分野の先端技術に触れる機会を創出するなど、新たな取組みも必要

入りやすく入ってみたくなる建物デザイン、航空機を見て楽しむことができる場づくりなど、地域に開かれたデザイン性の高い空港ビルの整備が必要

第3章 福井空港が目指す姿（案）

3. 福井空港が目指す姿（案）

激甚化・頻発化する災害に対応するため、福井空港の防災機能を強化し、県民の安全・安心を守る防災の拠点空港を目指す。併せて、観光資源に近い立地を活かし航空機を使った稼ぐ観光を促進する空港、不足する航空人材の育成や地域住民が集う空港を目指す。

上段：ビル外での整備内容
下段：ビル内の整備内容

（1）県民の安全・安心を守る防災の拠点空港

方針1 エプロンの耐震化等により、災害に強い福井空港を実現

方針2 大規模災害時における航空医療搬送や、災害対応参集者および物資の受入れに対応できる機能を強化

- ・エプロン拡張、耐震化
- ・ヘリ・小型機のスポットのエリア分け
- ・給油施設（燃料タンク）増設
- ・ヘリ用夜間照明
- ・災害時の指揮調整所、個別指揮所、DMA T活動スペース等

（2）観光・ビジネス利用ニーズにきめ細かな対応ができる空港

方針1 プライベートジェット機による観光利用促進

方針2 新たな取組みにもチャレンジできる施設整備

方針3 空港および場外離着陸場をヘリ観光の活動拠点化

- ・エプロン拡張、エリア分け【再掲】
- ・消防車の入替
- ・ビジター機用格納庫確保

- ・待合室、乗降ロビー、保安検査スペース

（3）次世代を育み、地域住民に親しまれる空港

方針1 次世代航空人材育成への貢献

方針2 地域住民や子どもたちが先端技術や空港に親しむことができる場づくり

- ・エプロン拡張、エリア分け【再掲】
- ・資格取得や空に関連した教室用の講義室
- ・体験搭乗協力団体等の活動スペース
- ・展示、地域活動スペース
- ・飛行機を見て楽しむことができる場所
- ・入りやすい空港ビルのデザイン

3. (1) 県民の安全・安心を守る防災の拠点空港

方針1

エプロンの耐震化等により、災害に強い福井空港を実現

能登半島地震級の災害時にも確実に活動できるよう耐震化されたヘリ駐機スポットと給油施設を確保。緊急時ヘリの夜間着陸にも対応

【整備内容】

- ・エプロン面積を約1.5倍に拡張(11→15スポット)し、耐震化
- ・ヘリと小型機の駐機スポットをエリア分けし誘導路を追加
- ・給油施設（燃料タンク）の増設により救援ヘリ3日分の燃料を確保
- ・ヘリ用の夜間照明を整備

能登半島地震時の能登空港



滑走路が被災したほか、燃料給油もストップ

出展:国土交通省
「空港における自然災害対策に関する検討委員会」資料より

方針2

大規模災害時における航空医療搬送や、災害対応参集者および物資の受入れに対応できる機能を強化

航空搬送された患者への医療対応や、災害対応参集者の活動および空輸支援物資の中継・集約に必要な機能・スペースを確保

【整備内容】

- ・災害時に関係機関が集まる指揮調整・合同会議室・個別指揮所の整備
- ・災害応援職員休憩室の整備
- ・DMA Tが医療活動できるスペースを確保
- ・DMA Tの資機材を置く倉庫の確保



現地合同本部
(令和5年度福井県原子力総合防災訓練より)

能登半島地震時の福井空港



道路網が寸断した際、被災地からはヘリ等で患者を大量搬送

3. (2) 観光・ビジネス利用ニーズにきめ細かな対応ができる空港

方針1

プライベートジェット機による観光利用促進

エプロン内でのハイヤー横づけによる快適な乗り継ぎや、プライバシーが確保できる待合室の提供など、利用者の多様なニーズに対応

【整備内容】

- ・エプロン面積を約1.5倍に拡張(11→15スポット)【再掲】
- ・ヘリと小型機のスポットをエリア分け【再掲】
- ・プライバシーを守ることができる待合室の整備
- ・ビジター機用格納庫の確保

エプロン内でのハイヤー横づけ



方針2

新たな取組みにもチャレンジできる施設整備

地元理解を前提に福井空港で離着陸可能な航空機のチャーターや多数の小型機が集うイベント実施など従来なかった利用にもチャレンジできる施設整備

【整備内容】

- ・ロビーを充実（到着・出発、保安検査等に対応）
- ・消防車の規格格上げ（受入れ航空機拡大のため）

方針3

空港および場外離着陸場をヘリ観光の活動拠点化

観光ヘリの活動拠点として空港の機能強化、市町と連携しさらなる場外離着陸場を確保

【整備内容】

- ・場外離着陸場の拡大
- ・ビジター機用格納庫の確保



3. (3) 次世代を育み、地域住民に親しまれる空港

方針1

次世代航空人材育成への貢献

福井空港で活動が盛んなグライダーや小型機のパイロットライセンス取得に取り組む団体が活動するスペースを確保し、福井に愛着を持つ航空人材育成に貢献

【整備内容】

- ・ヘリと小型機のスポットをエリア分け【再掲】
- ・ライセンス取得用の講義室など活動スペースを確保

小型機パイロットライセンス取得訓練

大学生・愛好家が毎週末実施している
グライダー訓練



方針2

地域住民や子どもたちが先端技術や空港に親しむことができる場づくり

空港近隣の研究機関等と連携し、宇宙・航空分野の技術開発に協力、空に関連した教室などをとおして地域住民や子どもたちが先端技術に触れる機会を充実
地域住民や子どもたちが、空港に親しむことができるイベントや体験搭乗を充実

地域団体等の活動やイベントに使いやすく、地域住民が気軽に立ち寄りたくなる空間づくり

【整備内容】

- ・体験搭乗協力団体等の活動スペースの確保
- ・展示スペースや地域活動スペースの確保
- ・飛行機を見て楽しむことができる場所を確保
- ・研究機関等の展示協力、地域との共同活動等を実施
- ・空港ビルに入りやすいようにデザインを工夫

体験搭乗の様子



JAXAによる航空教室

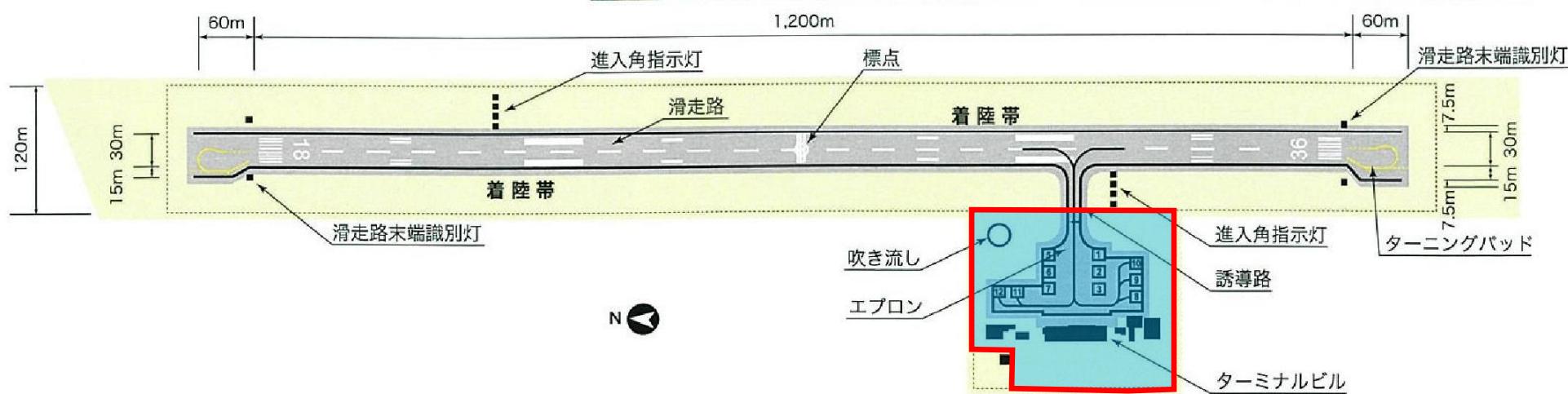


第4章

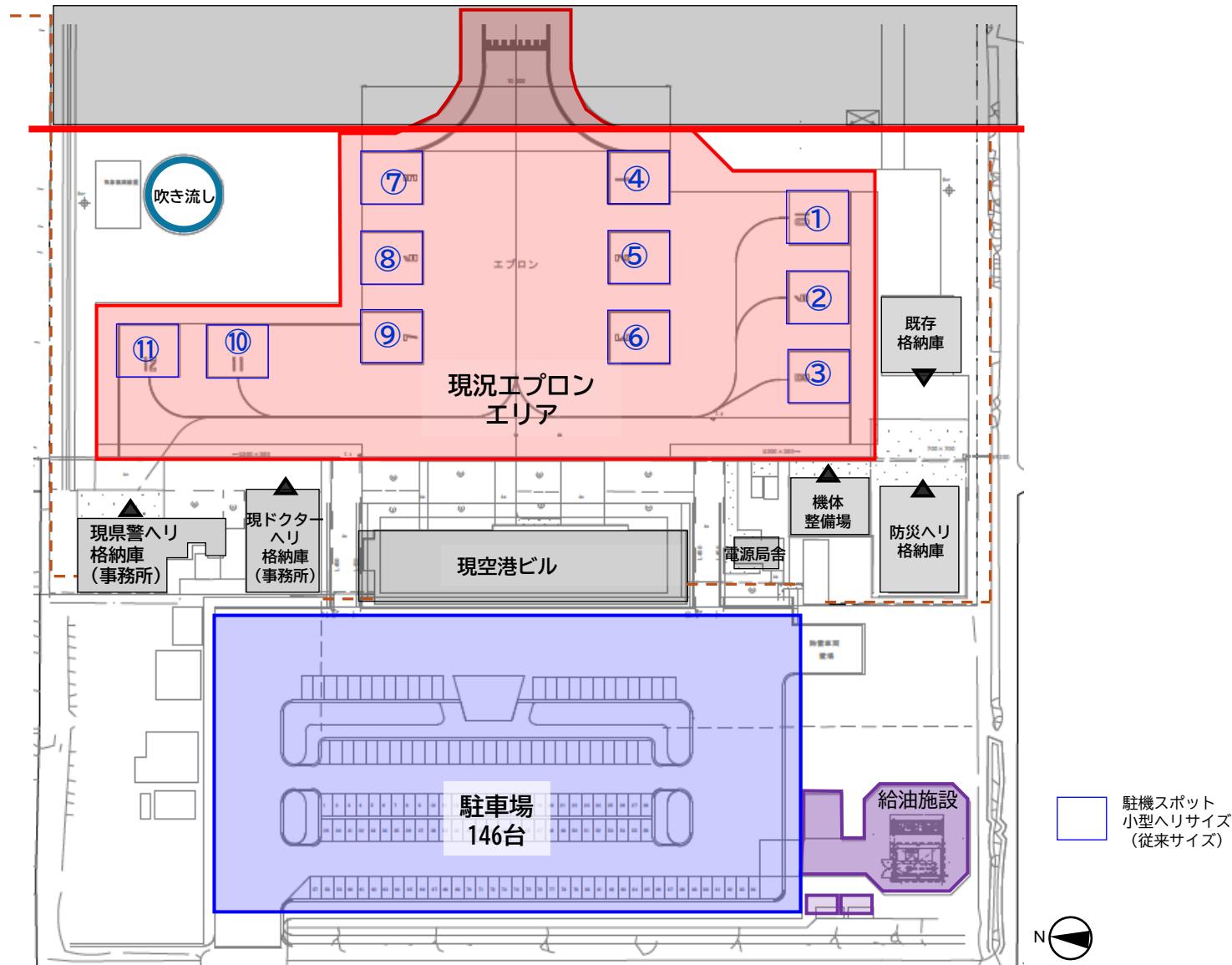
福井空港ビル再整備に係る敷地レイアウト（案）

4. 福井空港ビル再整備に係る敷地レイアウト (現況平面図)

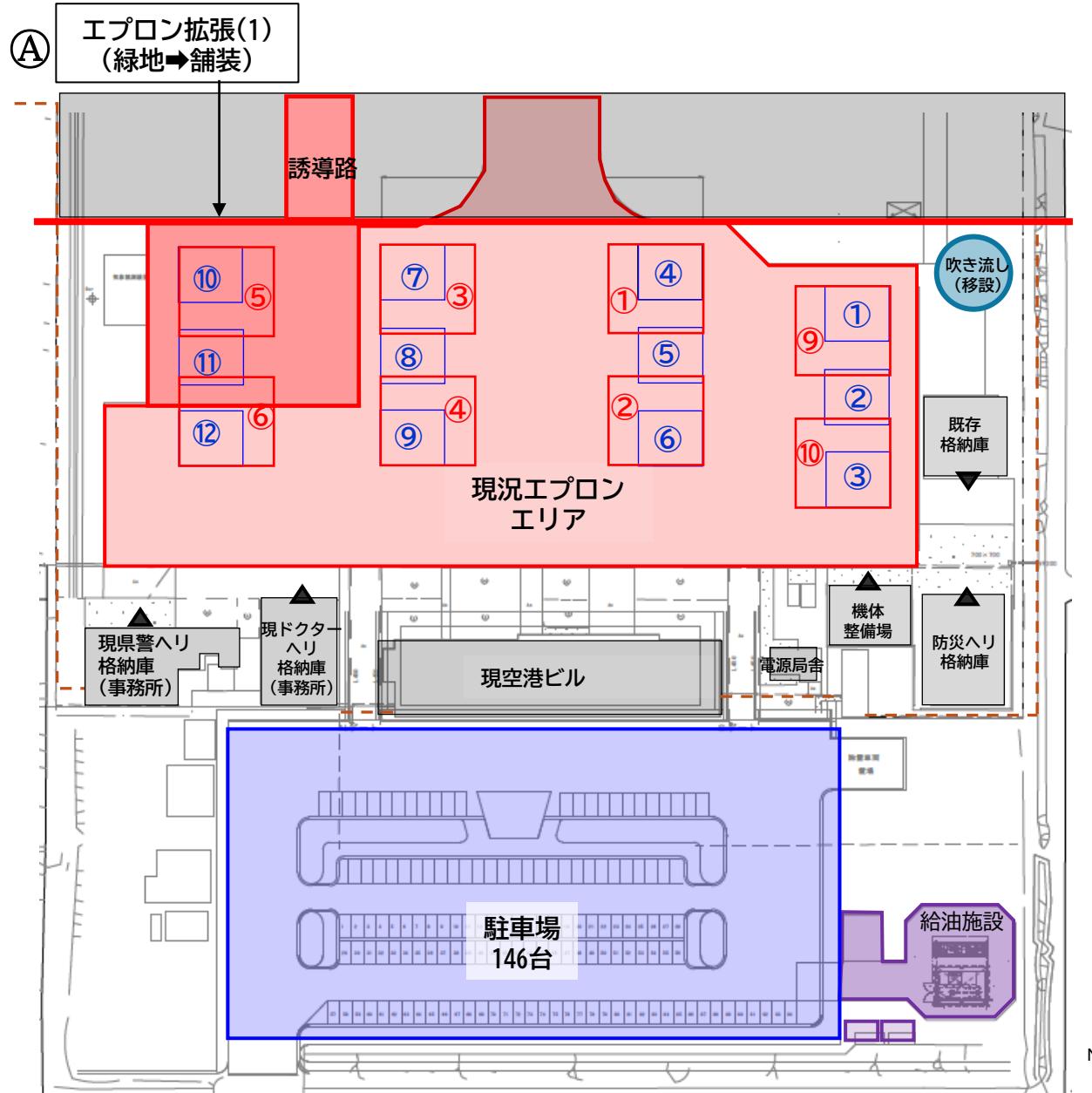
(現況平面図)



4. 福井空港ビル再整備に係る敷地レイアウト (①現況)



4. 福井空港ビル再整備に係る敷地レイアウト (案) (②エプロン拡張 1)

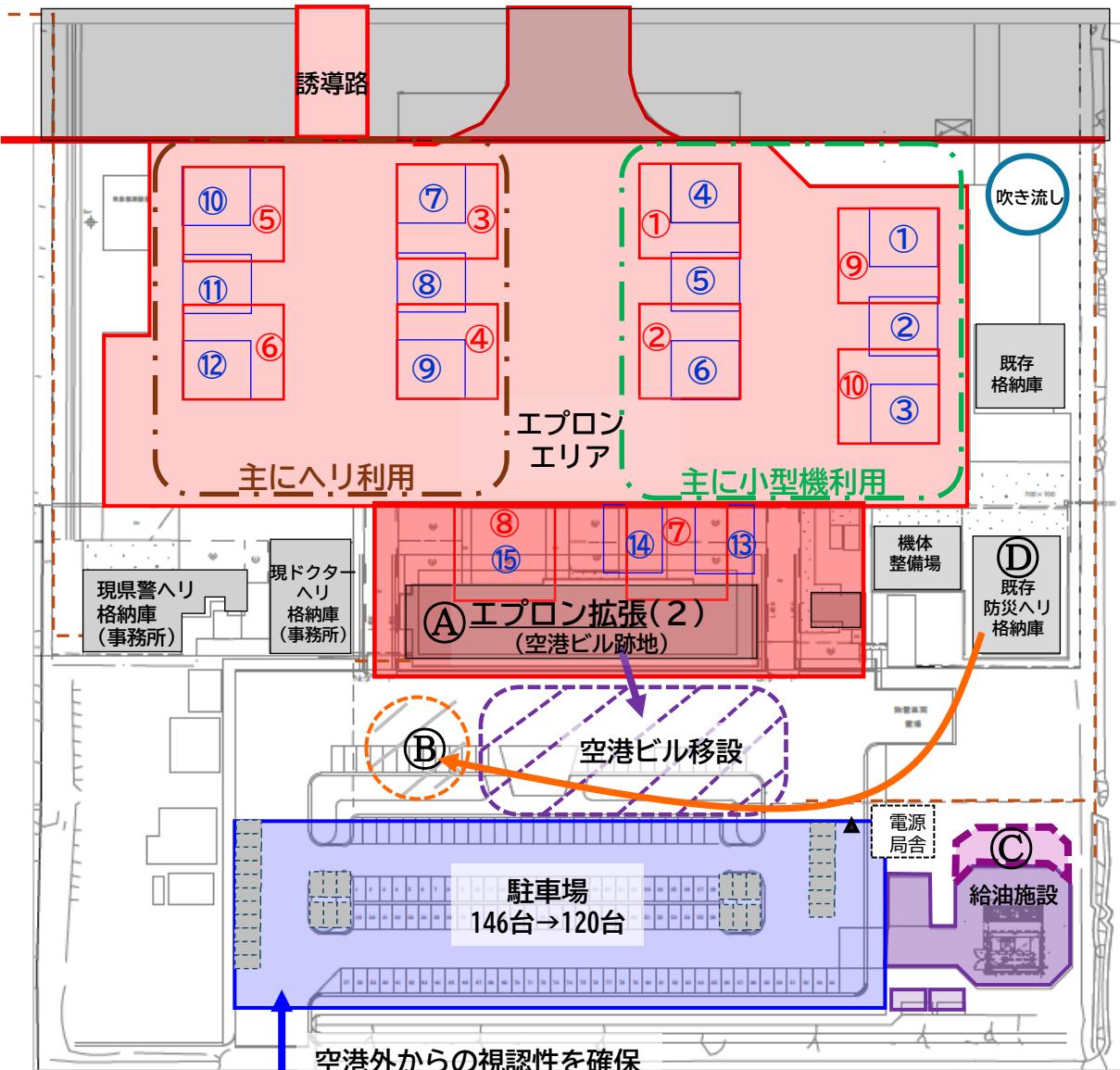


ポイント

①エプロン拡張（1）工事を先行実施、駐機スポットの数を増やし、誘導路も増設
防災機能強化の早期発現を図る

(現状) 11 スポット → 12 スポット

4. 福井空港ビル再整備に係る敷地レイアウト (案)



ポイント

<観光ビジネス・防災 共通>

- Ⓐ エプロンを拡張し、小型機やヘリが利用できる駐機スポットの数を増やす

(現状) 11スポット → 15スポット

※能登地震の際は、北陸地方で防災・警察ヘリが最大14機、同時に活動

<防災>

- Ⓑ 防災ヘリの格納スペースを防災関係エリアに移すことで防災関係ヘリの格納庫、駐機場を一定のエリアに集める

- Ⓒ 給油施設 (燃料タンク) の増設により救援ヘリ3日分の燃料を確保

(現状) 1. 5日分 → 3日分

<観光ビジネス>

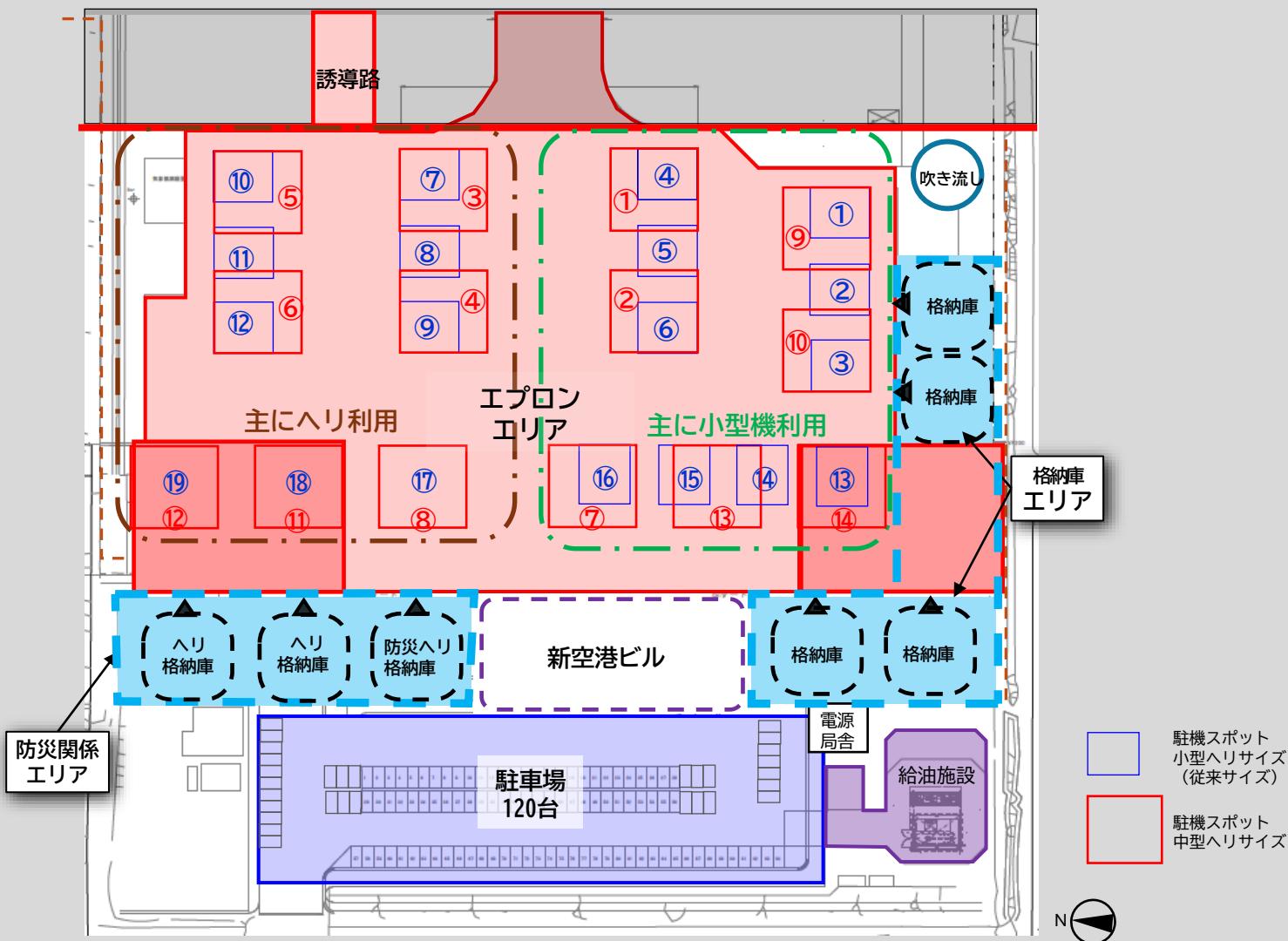
- Ⓓ 防災ヘリ格納庫の新設後は、現在の防災ヘリ格納庫を民間利用等に流用

格納可能機数 (現状) 2機 → 4機

駐機スポット
小型ヘリサイズ
(従来サイズ)

駐機スポット
中型ヘリサイズ

〈参考〉空港敷地内の将来土地利用イメージ



第5章

新空港ビルに導入する機能（案）

5. (1) 他空港ビルからみる福井空港に必要な基本機能

タイプの異なる他空港の事例を比較すると、空港の基本的な機能は、「管理機能」、「関連業務機能」、「ターミナル機能」の3つと考えられる。

	事例1	事例2	事例3	
管理機能(事務室等)	○	○	○	
関連業務機能 (空港消防・給油・気象観測)	○	○	○	
ターミナル機能 (出到着ロビー・搭乗待合室・バゲージクレーム、 売店等)	—	○	○	
テナント入居機能(関連業務以外)	—	○	○	
商業スペース、その他 (規模の大きい飲食・店舗、多目的ホール等)	—	—	○	
他空港の例	 岡南飛行場 岡山空港が昭和63年開港(定期便)	 天草空港	 県営名古屋空港	
福井空港				
市人口	344,067 (坂井市+福井市)	712,940 (岡山市)	102,816 (天草市+上天草市+苓北町)	2,322,143 (名古屋市)
立地(距離)	福井駅から 約11km	岡山駅から約10km (バスで約40分)	天草市役所から約5km (車で約15分)	名古屋駅から約13km (直行バスで約25分)
定期便の有無	無	無	有(5便/日)	有(22便/日)
旅客数(R5年度)	—	—	44,437	937,096
着陸回数(R5年度)	4,623	5,103	1,646	20,116

5. (2) 新空港ビルに導入する機能 (案)

新空港ビル内には3つの必要な基本機能に加え、目指す姿を実現するため以下のとおり機能を導入する。

- ① 防災の拠点機能(防災機能)
- ② 観光・ビジネス利用に対応できる機能(ターミナル機能)
- ③ 人材育成や地域住民の活動に利用できる機能(地域利用機能)
- ④ 空港の管理・運営機能(管理機能)
- ⑤ 空港運営を支える機能(関連業務機能)

} 拡充・追加 (目指す姿を実現する機能)
} 必要面積を確保

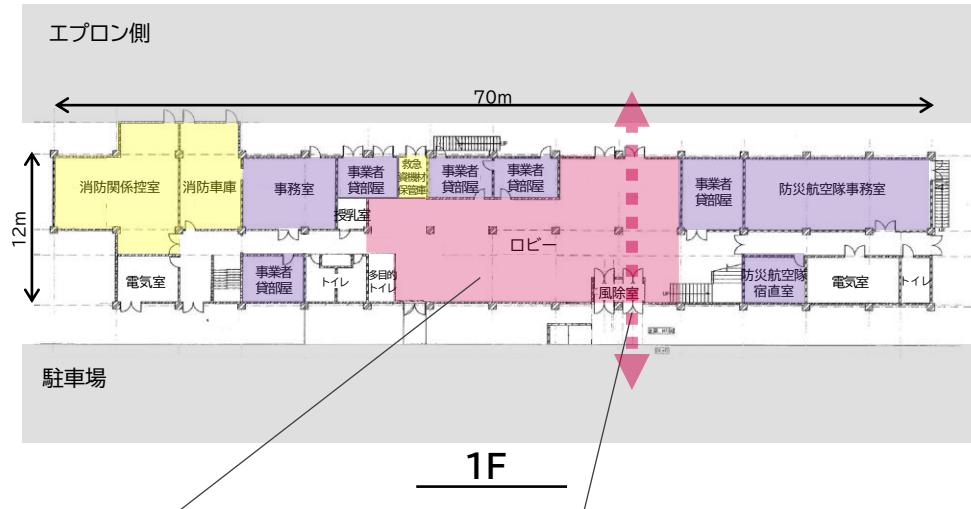
機能に応じた諸室の計画（現空港ビルと新空港ビル諸室の諸元比較）

□ 拡充・追加する部分

室名等	現空港ビル		新空港ビル	
	面積	課題	規模・性能	整備方針
1F ロビー 【防災】DMATによる医療活動拠点スペース 【ターミナル】チャーター便等乗降ロビー・保安検査・待合 【地域利用】展示や地域活動等	245m ²	<ul style="list-style-type: none"> 要医療患者8人までDMATが医療対応可能 出入口が狭く、バリアフリーに非対応のため、患者搬送時に支障あり まとまった人数に対応できるスペースなし 展示や地域活動等には手狭で暗い 	拡充	<ul style="list-style-type: none"> 要医療患者15人程度、DMATが医療対応可能な面積、無柱空間 エプロン～駐車場までの患者搬送時のスムーズな動線確保（出入口の拡張、バリアフリー） 可動間仕切り（乗降ロビーや保安検査等必要時に対応） 多様な展示やイベント等に対応可の広々とした明るい空間
多目的スペース（共有会議室等） 【防災】災害時の指揮調整所、個別指揮所 【地域利用】資格取得用講義室、地域活動等	180m ²	<ul style="list-style-type: none"> 部屋の中央に柱があり、悪い使い勝手 災害時の個別指揮所等に対応不可 	拡充	<ul style="list-style-type: none"> ロビー近傍に無柱の、現状同程度の大会議室を確保、可動間仕切りの設置（臨機応変な利用） 共有の小会議室等を追加
休憩室、待合室 【防災】災害時応援ヘリパイルット・隊員休憩室 【ターミナル】プライベートジェット利用者休憩室、パイロット休憩室	7.5m ²	<ul style="list-style-type: none"> 2人程度の定員、冷暖房なし プライベートジェット利用者待合室には不適 	拡充	<ul style="list-style-type: none"> 応援ヘリパイルットの休憩スペースを確保 プライバシーが確保された待合室確保（1Fエプロンから直接出入、ロビーを通らず外に出る動線確保）
DMAT用倉庫【防災】医療器具等資材倉庫	0m ²	・なし	追加	・必要な面積を確保
防災航空隊事務室【防災】事務所、宿直室等	110m ²	・応援航空隊受け入れの際の更衣室やトイレが不十分	拡充	・応援航空隊受け入れに対応できる更衣室やトイレの拡充（女性用含む）
展望デッキ【地域利用】展望、活動スペース	ベランダ利用	・狭く、視界も限定的（屋上は未開放）	拡充	・ベンチ、屋根等、居心地に配慮し屋上等に確保
管理事務室・消防 【管理】空港管理・運営事務室、消防棟	297.5m ²		必要面積	・実情に合わせて規模を整理
事業者貸部屋 【関連業務】給油、メンテナンス、ヘリ運航、小型機パイロット団体、研究等	296m ²		必要面積	・実情に合わせて規模を整理
その他共用部（トイレ、廊下、電気室、倉庫等）	385m ²		必要面積	

5. (3) 現空港ビルの施設現況と課題

現空港ビル平面図



- DMAT医療対応できるのは要医療患者8人程度まで(柱も障害)
- チャーター便や多数の小型機が集うイベント等、まとまった人数に対応できるスペースがない
- 展示や地域活動等には手狭で暗い



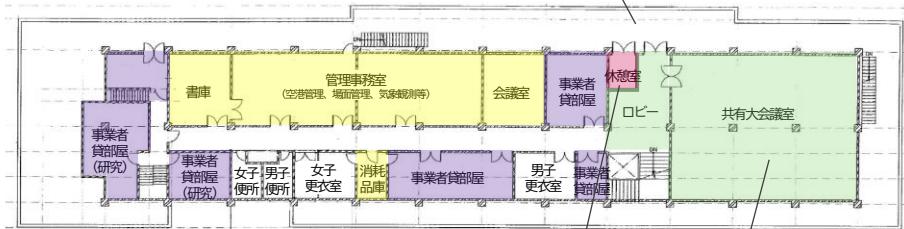
- 出入口が狭く、バリアフリーに非対応のため、患者搬送時に支障あり
- 心理的に入りにくいビルエントランス



- 医療器具やDMAT資材の倉庫がない



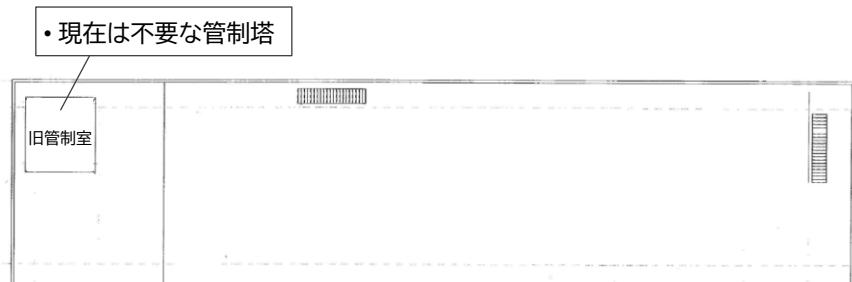
- 展望デッキとしてのベランダ。狭く、視界も限定的(屋上は未開放)



- 2人程度が定員のパイロット休憩室、冷暖房なし
- プライベートジェット利用者待合室には不適

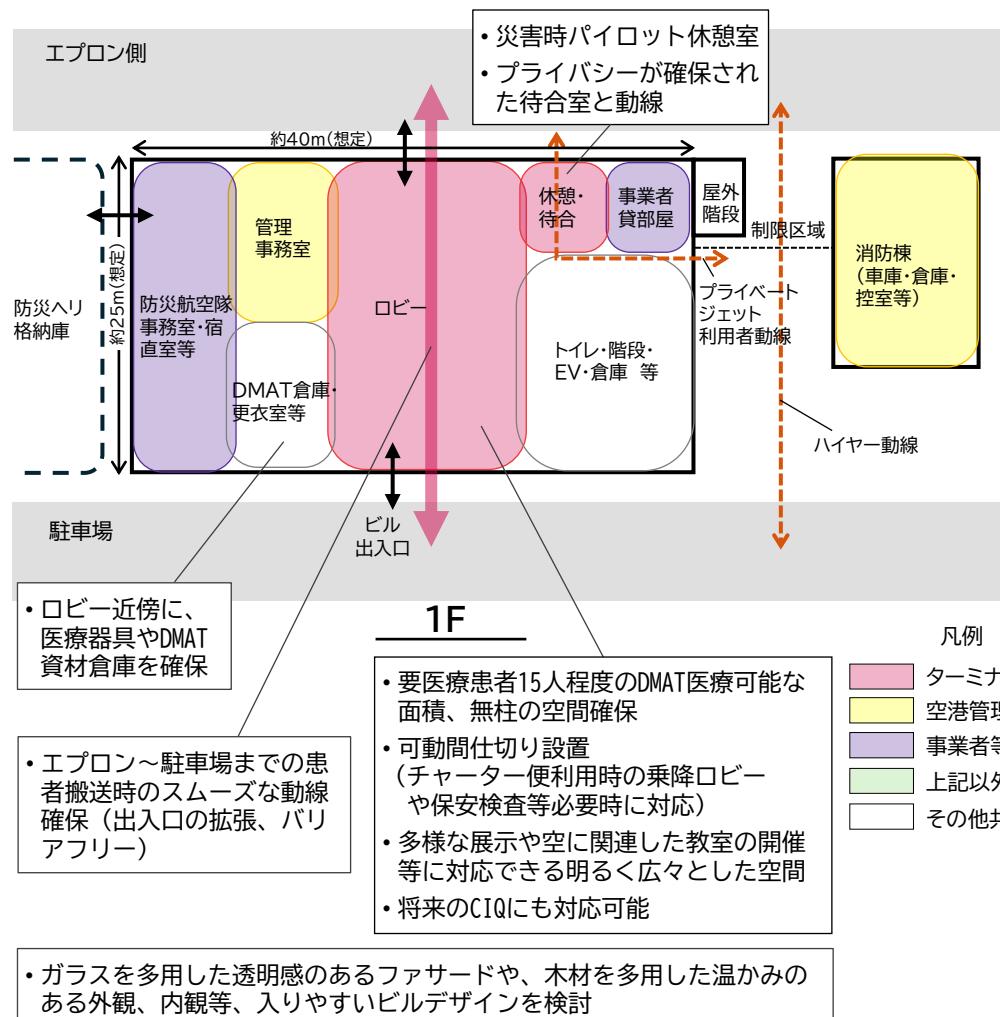


- 部屋の中央に柱があり、使い勝手が悪い
- 災害時の個別指揮所等に対応不可

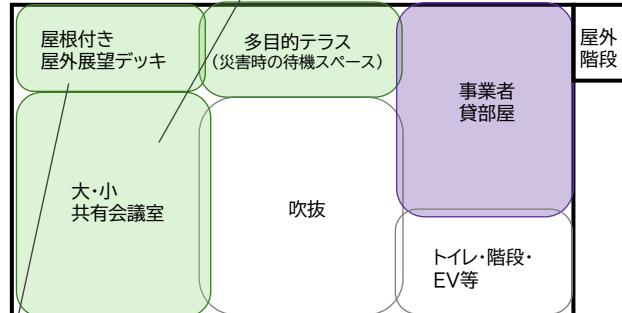


5. (4) 新空港ビルのゾーニングイメージと整備方針

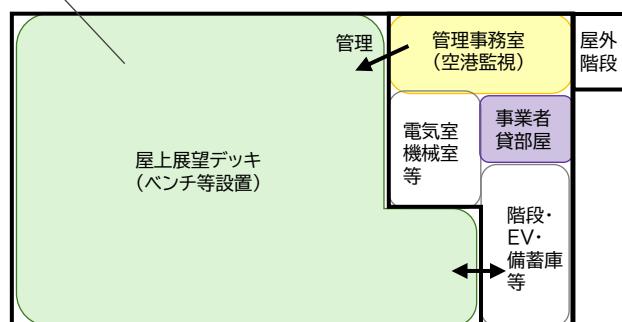
新空港ビル平面(ゾーニング)イメージ



- ・ロビー近傍に無柱の大会議室を確保、可動間仕切りの設置(臨機応変な利用)
- ・共有の小会議室等を追加



- ・ベンチ、屋根等、居心地に配慮した展望デッキを確保

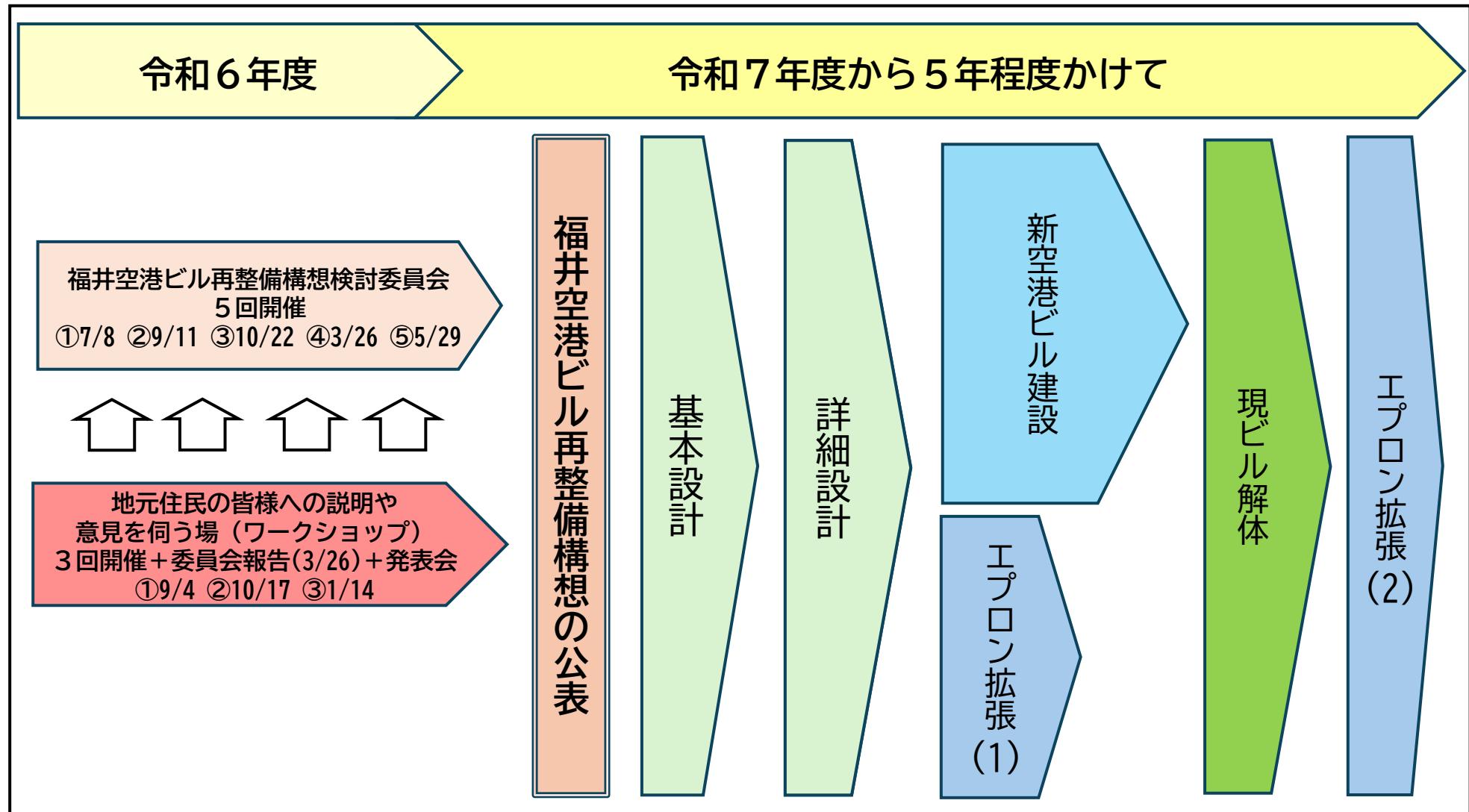


第6章

今後のスケジュール

6. 今後のスケジュール

今後は、本構想をもとに、令和7年度から5年程度かけて、新空港ビルなどの基本設計、詳細設計により、規模の精査、事業費・その軽減策の検討等を行ったのち、新ビル建設などを行います。現在風向計があるエプロンの北東側で予定しているエプロン拡張（1）については先行実施し、防災機能強化の早期発現を図ります。



參考資料

福井空港の将来像と今後の取組方針について

1 福井空港の現状

(1) 利用状況について

- 昭和51年以来、定期便は就航していないが、学生の課外活動としてグライダーによる利用が活発であるほか、操縦士ライセンス取得のための訓練施設、スカイフェス等の航空レジャーイベントの会場等として活用されている
- 県警察航空隊、県防災航空隊のヘリコプター、県立病院を基地病院としたドクターへリが配備され、県民の安全、安心な暮らしを守る活動拠点として、また広域的な災害対応の拠点として活用されている

(2) 施設について

- 滑走路：長さ1,200m×幅30m、駐機スポット数：11か所、運用時間：9時から17時まで（17時までに日没となる場合は、日没まで）、供給燃料：航空機ガソリン、ジェット燃料
- 空港ビルは、建設から57年が経過し、老朽化が著しいものとなっており、建替等が必要と考えられる
ビル内は、管理事務所のほか、事業者貸部屋、研究等による貸しスペースとして利用されている

2 福井空港の将来像

将来の空港の姿として、グライダーを含む小型機などによる現在の利用者と共存しながら、離着陸の時間調整などに柔軟に対応できるという特徴を活かし、以下のような空港を目指す

- 多様な形態の小型機による、観光やビジネスを中心としたスポット的な利用を促進し、長期的には、地元理解等を前提に、定期的な利用を目指す
- 防災、救急医療の拠点として、大規模災害時に対応できるよう機能強化を目指す

将来像を実現するために短期、中期、長期に分けて進めていく（詳細については次ページに記載）

(1) 短期（目途）R5年度～R6年度＝挑戦

- 様々なモニターツアー等により、福井空港の利活用の可能性を探る
- 利活用の状況を踏まえて、具体的な新空港ビルの構想（案）をまとめていく

(2) 中期（目途）R7年度から5年程度＝実践

- 事業採算性のある取組の商業運航の開始を目指す
- 新空港ビルの構想を踏まえて、空港ビルを再整備する

(3) 長期＝飛躍

- 駐機スポット数や格納庫用地の拡充などさらなる空港施設整備を検討し、定期的な利用を目指す

(1) 空港全体の機能強化について

<短期> (目途) R5年度～R6年度

- 民間事業者によるヘリの運航について、市町と連携して県内主要観光地付近等（スキージャム勝山駐車場等）に場外離着陸場を確保のうえ、広く試験飛行を実施して活用の可能性を検証し、観光目的での新たな利用を提示する
- プライベート機や、小型ジェット機のチャーター利用について、離着陸の時間調整やエプロン内の乗り継ぎに柔軟に対応できるという特徴が一般に認知されていないため、営業ツールを作成し、県外事務所等と連携するなど利用を呼びかけるとともに、旅行商品のモニターツアーの実施などにより、観光・ビジネス目的での利用増加を図る
- ビジネス目的で小型ジェット機を利用する企業への補助や、未婚のカップルを対象とした小型ジェット機による遊覧飛行の実施
- 国外からのプライベート機の受入に向けて、C I Q対応について運用を検討し、さらなる利用促進を目指す
- 既存の空港ビルについて、離着陸手続きの動線変更やロビーの展示内容のリニューアルなどにより有効活用し、利用者等の満足度向上を図る
- 9月の「空の日」にあわせたスカイフェスの開催や、体験搭乗会の実施など、地元住民が空港に足を運ぶ機会の増加を目指す
- 燃料給油や機体整備機能の維持を検討するほか、グライダーや小型機による継続的な利活用を図る（※中期以降も共通）
- 空港運用について、現在の空港施設（照明設備なし）での運用時間の延長を地元と調整のうえ検討する

<中期> (目途) R7年度から5年程度

- 民間事業者によるヘリの運航について、プライベート機や小型ジェット機のチャーター利用との接続も視野に、ヘリの運航事業者による県内主要観光地等を結んだ商業運航の開始を目指す
- 国内のプライベート機や、小型ジェット機のチャーター利用について、県外事務所等と連携して営業活動を継続し、更なる利用増加を図る
- 国外からのプライベート機について、海外事務所等と連携して福井空港の利用をPRし、福井空港での受入を目指す

<長期>

- 空港運用について、照明設備を新設したうえでの運用時間の延長の検討、アクセスの向上を図り、さらなる活性化を目指す
- 空港ビルの再整備とあわせ、駐機スポット数や格納庫用地などの空港施設を拡充し、地元理解と事業採算性を前提に、現在の福井空港で離着陸可能な航空機・ヘリに上る定期的な利用を目指す
- 駐機スポット数を拡充し、大規模災害における防災ヘリやドクターへリの参集拠点としての機能強化を図る

<さらなる展望>

- 貨物輸送については、安定的な需要の確保、輸送コストの縮減といった課題があるため、今後需要を探り、定期的な輸送の可能性を検討していく
- 機体整備工場、航空運送事業者の活動拠点、空港に関係した体験施設などの整備については、今後需要を探り、可能性を検討していく
- 「空飛ぶクルマ」など次世代モビリティについては、国内での実証実験の進捗を見て、今後、受入に必要な対応を検討していく

(2) 空港ビルの再整備について

- 令和5年度から6年度にかけて、利活用の状況を踏まえ、入居者や地元等関係者と協議を行い、現空港ビルの管理者と調整のうえ、具体的な新空港ビルの構想（案）をまとめる

○令和7年度から5年程度をかけて、新空港ビルの構想を踏まえ、空港ビルを再整備する

目的	管理	旅客利用等の増加	地域交流等	利用者の活動スペースの確保		旅客利用の増加		利用者の活動スペースの確保	その他利便性向上
機能	管理事務所	ロビー	展望スペース	事業者用貸部屋	会議室 (共有スペース)	C I Qスペース (海外客対応)	受付スペース (カウンター等)	待機、休憩所 (乗務員、飛行訓練者、災害対応従事者用)	飲食店、イートインスペースの整備等
現状	○	○	○	○	○	—	—	—	—
将来	○	現状有する機能について継続の必要性や規模を検討				追加の必要性や規模を検討			

(資料2) (R4～6年度) 福井空港機能強化等タスクフォース 体制表

【R4】 9所属計22名

- 福井空港全体の機能強化や利活用を行うため、タスクフォースを設置

チーム長	土木部 副部長（防災・特定事業）
副チーム長	新幹線・まちづくり対策監

土木部	港湾空港課 福井空港事務所
未来創造部	交通まちづくり課 未来戦略課

文化交流部	観光誘客課
-------	-------

防災安全部	消防保安課
-------	-------

健康福祉部	地域医療課
農林水産部	流通販売課
産業労働部	企業誘致課

- ・各課ごとに空港機能強化の課題・方針を検討。
 - ・検討状況を月1回のペースで共有(8回開催)。
【主な内容】
 - ・防災拠点としての機能強化(スポットの増設など)
 - ・チャーター機利用などの富裕層向け誘客
 - ・観光・ビジネス目的での利用にむけたPR
- ↓
- R5.3 「福井空港の将来像と今後の取り組み方針」を策定

【R5】 14所属計37名

<体制強化のポイント>

- ・副リーダーに**交流文化部副部長**を追加(副リーダーを2名体制に)
- ・港湾空港課に事務局の**空港利活用室**を新設
- ・富裕層向けの対策強化のため、魅力創造課(**ブランド対策**)を追加
- ・福井空港の利活用を全国にPRするため、**県外事務所**を追加

チーム長	土木部 副部長（防災・特定事業）
副チーム長	未来創造部 副部長
副チーム長	交流文化部 副部長

土木部	港湾空港課 空港利活用室 福井空港事務所
未来創造部	交通まちづくり課 未来戦略課 東京事務所 大阪事務所 名古屋事務所 京都事務所

文化交流部	観光誘客課 魅力創造課
-------	-----------------------

防災安全部	消防保安課
-------	-------

健康福祉部	地域医療課
農林水産部	流通販売課
産業労働部	成長産業立地課

- ・体制を強化し、4つの部会(防災・極・営業・地元機運醸成)を設置。各部会ごとに福井空港機能強化案を検討・実施。
- ・各部会の状況を月1回のペースで共有(8回開催)
【主な内容】
 - ・県総合防災訓練の実施
 - ・モニターツアーの実施
 - ・福井空港プロモーションツール作成
 - ・スカイフェス開催

【R6】 18所属計44名

<体制強化のポイント>

- ・チームリーダーに**土木部理事**、副リーダーを3名体制に
- ・嶺南地域の観光対策のため**嶺南プロジェクト推進室**を追加
- ・空港の防災拠点化のため**危機管理課**、**警察本部**を追加

チーム長	土木部 理事（土木技術）
副チーム長	新幹線・交通まちづくり局 副局長
副チーム長	交流文化部 副部長（インバウンド）
副チーム長	土木部 副部長(防災・特定事業)

土木部	港湾空港課 空港利活用室 福井空港事務所
未来創造部	交通まちづくり課 未来戦略課 東京事務所 大阪事務所 名古屋事務所 京都事務所
文化交流部	観光誘客課 魅力創造課
防災安全部	消防保安課
健康福祉部	嶺南プロジェクト推進室

文化交流部	観光誘客課 魅力創造課
-------	----------------

防災安全部	消防保安課 危機管理課
-------	-----------------------

健康福祉部	地域医療課
農林水産部	流通販売課
産業労働部	成長産業立地課

県警本部	警備課
------	-----

- ・危機管理課や県警本部警備課（福井県警察航空隊）も加わり、防災機能の強化に向けた敷地レイアウトの検討を中心に協議。
【主な内容】
 - ・敷地レイアウトの検討
 - ・空港ビルに必要な機能の検討

区分	所属	委員氏名
委員長	福井大学 工学部 教授	川本 義海
委員	福井工業大学 環境学部 教授 (学長補佐 まちづくりデザインセンター長)	三寺 潤
委員	慶應義塾大学 商学部 教授	加藤 一誠
委員	福井空港株式会社 取締役	青山 直弘
委員	中日本航空株式会社 ヘリコプター運航部 調査役	真木 賢一
委員	福井県小型機活性化推進協議会 副会長	後藤 秀和
委員	福井商工会議所 副会頭	清水 則明
委員	坂井市商工会 会長	半澤 政丈
委員	公益社団法人福井県観光連盟 会長	山田 義彦
委員	一般社団法人DMOさかい観光局 会長	刀根 亨
委員	福井空港振興協議会 会長	西行 茂
委員	坂井市 市長	池田 穎孝
委員	福井の空を語る会 事務局長	佐々木 康男
委員	福井空港機能強化等タスクフォース チームリーダー	平林 透
オブザーバー	国土交通省航空ネットワーク部空港計画課 課長	楠山 哲弘

(敬称略)

(資料3) 2/2 「福井空港ビル再整備構想検討委員会」での主な意見

【防災に関する意見】

- ・小型機はヘリコプターが離陸する際の風から影響を受けるため、小型機とヘリコプターの駐機スポットのエリア分けをすべき。
- ・駐機スポットが拡張できれば小型機の利便性も上がる。
- ・エプロンは航空機から見ると意外に小さい。
- ・空港は点の施設、大規模災害時にも比較的早く復旧し災害後の拠点となりうる。

【地域住民に親しまれる空港に関する意見】

- ・福井空港は「空の入り口」で科学技術が詰まった施設が周辺には数多く、それらの施設との連携を。
- ・商業の中心であり地域的な魅力がある立地
- ・周辺の店舗から持ち込みという手法あり
- ・地元の方にとってもメリットがある施設に。
- ・防災教育や空港の職業教育、教育旅行の受入れ。
- ・特徴はグライダーのメッカ。次の世代を育てる役割。
- ・入りやすい外観。

【観光・ビジネス利用に関する意見】

- ・小型機はヘリコプターが離陸する際の風から影響を受ける。
- ・駐機スポットが拡張できれば小型機の利便性が上がる。
- ・エプロンは航空機から見ると意外に小さい。
- ・格納庫が足りていないため、整備の検討を。
- ・運用時間が短いと感じることもある。
- ・観光・ビジネス面でも空の利用について議論。
- ・一時滞留するための付加価値を提供。
- ・恐竜博物館に結び付ける。
- ・木材（県産材）の一部使用による「福井らしさ」。

【その他、共通する意見など】

- ・防災がベースとしてありながら、先端技術との連携を。
- ・パブリックスペースを今より広く（ソフト面でのスペース確保）
- ・コンパクトなビルを建てる場合でも、フレキシブルな使い方などにより機能拡充が可能
- ・なるべく駐車場を減らさない。
- ・あれもこれも一度に全てということは難しいため段階を分けて整備を。
- ・将来形も念頭に、長期的な視点で再整備の計画を進めてほしい。
- ・自ずから建物の面積が限られてくる。建物の階数、入れるべき機能の絞りこみについて検討（身の丈に合った整備）を。
- ・委員会で議論したことを建物の設計や空港再整備に活かしてほしい。

(資料4) ワークショップでの議論

第1回 (9月4日)
18:30~20:30

第2回(10月17日)
19:00~20:30

第3回 (1月14日)
19:00~20:30

委員会への報告 (3月26日)
10:00~11:30

発表会 (調整中)

目的 福井空港ビルの活用を考える
講 師 福井工業大学 環境学部 デザイン学科
三寺潤教授 丸山晴之准教授
参加者 県児童科学館館長 1名
民間まちづくり団体 1名
地元民間事業者 3名
地元まちづくり協議会、区長等 11名
福井大学、福井工業大学生 4名
計 20名



～ワークショップで出た意見～ 新しい空港の姿をつくる機能

- ・軽度の運動ができる
- ・地域に開かれた空間が必要とされる
- ・道の駅のような玄関口
- ・東西で分断されている風景をつなぐ要素
- ・カフェ・レストランなどの飲食機能
- ・街中らしい空港の姿
- ・可変できる空間構成
- ・道の駅のような
- ・気軽に来れる軽度の運動施設
- ・散歩道
- ・健康的に過ごせる空港
- ・子どもの遊び場
- ・宿泊機能
- ・災害時の利用想定
- ・木の素材や木漏れ日の温かみを
- ・防災機能も備えた屋根付き広場
- ・擬似体験できる遊び・学の空間
- ・緑地散策するような体験
- ・開放的な展望デッキ
- ・飛行機展示やショップ
- ・リビングのような空港
- ・パイロットの体験ができる
- ・家みたいにくつろげる
- ・飛行機について学べる

～福井工業大学の提案～ 空港ビルの将来像

コンセプト 「 空とまちと人が織りなす余白 」

空港の近隣にはコミュニティ施設や商業施設、研究拠点が近年、充実しているが憩いとなる場はエンゼルランドしかない。豊かなまちに必ずある豊かさを生み出す「余白」をこの地につくることで、エリア全体の魅力を高める。

- | 手法 | 機能 |
|-----------------|--------------|
| ・PFIのように利益を生み出す | ・防災 |
| ・無目的な機能性 | ・カフェ |
| ・多様性の許容 | ・コワーキング、オフィス |
| | ・展望テラス、公園 |

(資料5) R5・R6「福井の空を語る会」について

「福井の空を語る会」 県内17市町の首長、県議会議員、有識者、計25名で構成

(会長：県観光連盟 山田 義彦氏)

目的

福井空港などを利活用し、小型航空機などによるこれまでにない空路を構築して、新しいモビリティによる防災・産業・観光などの分野における地域貢献策を検討する。

R5年度

- 6/15 福空会総会
- 7/18・19 第1回 「場外離着陸場の選定の進め方について」など
- 8/17・18 第2回 「各市町における場外離着陸場の検討状況や課題について」など
- 9/27 第3回 「場外離着陸場の申請書作成業務の取組み状況等について」など
- 10/27 第4回 「福井県観光振興に関する講演」 など
- 11/27・12/1 第5回 「場外離着陸場候補地の調査結果等について」など
- 3/7 第6回 「県・福空会の来年度事業・スケジュールについて」など

R6年度

- 6/3 福空会総会
- 9/24 第1回 「講話-小型航空機を活用した観光誘客の拡大に向けて-」など
- 11/18 第2回 「場外離着陸場の活用-事例坂井市・南越前町・永平寺町-」など
- 3/28 第3回 「福井空港ビル再整備構想について」など